

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 『道草』における島田の位置

doi:10.29714/TKJJ.200305.0001

淡江日本論叢, (12), 2003

作者/Author：曾秋桂

頁數/Page：1-25

出版日期/Publication Date：2003/05

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200305.0001>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



『道草』における島田の位置

淡江大学日文系 副教授
曾秋桂

論文要旨

周知の如く、『道草』は、漱石の唯一の自伝的作品である。そうした中で、三好行雄は、「『道草』は島田の出現とともに始まり、島田とともに幕を閉じる」と述べ、島田が出現する意味を重視している。その他、先行研究の中での諸論者は、いずれも島田の存在の大きさに着目している。

しかし、島田がどのように健三に接近したか、また健三がどのようにそれに対応しているかについて、今まで詳しく触れられていないのが、事実である。それは、正しく桶谷秀昭が『道草』はよみかたによってはかなり難解な小説だが、難解の一つは健三のところへ昔の関係をむし返し無心に人をよこす島田に、彼が対処するときの行為の「根拠」にある」と述べた通りである。その難解さを解くために、島田がどのように健三に接近したか、また健三がそれにどのように対応しているかの実態を作品に即して探ることは『道草』を読むために、必要かつ有効な方法だと思われる。そこで、本論文は、まず『道草』における島田の足跡をたどり、整理することにした。

島田の健三への交渉の経過をたどった結果、島田が計画的に健三に接近し、最終的にかなりまとまった金額を得るために漸進的に金銭的援助を要求していった経緯がはっきり浮かんできた。島田は、その点で、目的を達するために計画的合理的に行動している近代的人間であり、健三にとっては、そうした近代的世界を表徴する人物とも見られる。

キーワード：

『道草』、島田 健三、交渉、近代的人間

一. 始めに、

周知の如く、『道草』は、漱石の唯一の自伝的作品¹である。とはいえ、『道草』に描かれたことを、全て漱石自身に当てはめて見ることの危険性はつとに指摘されてきた²。こうした、自伝的小説の『道草』に潜んでいる虚構性については、既に石井和夫によって纏められている³。また、漱石文学の全体から考えた『道草』の位置付けに対して、諸論者間での評価は賛美両論となっている⁴。が、いずれにせよ、『道草』は、漱石の小説の中で、漱石自身の体験を一番多く取り入れている小説だということは否定できない。

そうした中で、三好行雄は、『道草』は島田の出現とともに始まり、島田と

¹宮井一郎(1967)『漱石の世界』講談社P220

²荒正人(1979)『漱石——人とその作品』日本リーダーズダイジェスト社P93では、『道草』が自伝的要素を多分に持っていることは否定できぬが、自伝そのものではない」と述べている。また、相原和邦(1979)「評釈・『道草』」『國文學解釈と教材の研究』第24巻6号P145では、「いずれの素材に対しても精妙な処理が加えられ、生活記録とは別次元の作品世界が産出されているという事実である」と、『道草』の性格を指摘している。大岡昇平(1988)『小説家夏目漱石』筑摩書房P389では、『道草』の記述を鵜呑みにし、漱石の伝記を組立てるのは危険です。一方、漱石は遺族や弟子によって、その生活は文豪、人格者に飾り立てられているので、現在発表の資料から、漱石の伝記、作品を論ずるのは危険だ、というのが私の結論的意見なのですが」と述べている。

³石井和夫(1986)「『道草』・関係の論理」『國文學解釈と教材の研究』第31巻3号P48

⁴奥野健男(1956)「『道草』論」『解釈と鑑賞』では、「夏目漱石の作品のうち『道草』ほど、人によって評価の喰い違っている作品は少いであろう。これを漱石の最高傑作とする者もあれば、いちばんつまらない、書かずものがなの作品だとする者もいる。(中略)この『道草』が本来の漱石から外れた価値の低い作品と映るのは、無理からぬことである」と言っている。また、平野謙(1956)「夏目漱石」『芸術と実生活』講談社では、「むかしから私は漱石がもし『道草』を書かなかったら、首尾一貫してどんなに立派だったろう、という意見を持っていた。『道草』は漱石のたゆみない制作過程における一汚点にほかならぬ、といさえ考えていた。『道草』をほめる小田切秀雄と、その点で議論したこともある。しかし、『明暗』が書かれるためには、やはり『それから』から『こゝろ』にいたる作品群の反指定として、『道草』執筆の必要だったことをいまは認めざるを得ない」と述べている。

ともに幕を閉じる」と述べ、島田が出現する意味を重視している⁵。そして、『道草』における島田の描き方については、平岡敏夫が「『道草』における相対把握、あるいは方法としての則天去私的視点は、島田には及んでいないのではないか」と指摘し、島田の描き方の特殊性に目を向けている⁶。一方、健三が島田に対応する態度に関して、赤木桁平は健三と細君との対応場面と共に、「いつも劇的興味を湛えへて読者に迫つて来る」と指摘している⁷。また、その都度、変わる健三の島田に対する呼び方は、健三の島田に対する心境の変化を表していると、細谷博は述べている⁸。このように先行研究の中での諸論者は、いずれも確かに島田の存在の大きさに着目してきた。しかし、島田がどのように健三に接近したか、また健三がどのようにそれに対応しているかについて、今まで詳しく触れられていないのが、事実である。それは、正しく桶谷秀昭が『『道草』はよみかたによってはかなり難解な小説だが、難解の一つは健三のところへ昔の関係をむし返し無心に人をよこす島田に、彼が対処するときの行為の「根拠」にある」と述べた通りである⁹。その難解さを解くために、島田がどのように健三に接近したか、また健三がそれにどのように対応しているかの実態を作品に即して探ることは『道草』を読むために、必要かつ有効な方法だと思われる。そこで、本論文は、まず『道草』

⁵三好行雄編(1984)『鑑賞日本現代文学』第5巻角川書店 P230

⁶平岡敏夫(1983)『漱石序説』塙書房 P384 では、次のような記述が見られる。

いわゆる「道草」における相対把握、あるいは方法としての則天去私的視点は、島田には及んでいないのではないか。この作品は第一回から「帽子を被らない男」として登場した島田が最終回(百二)で百円受領、今後一切の関係を断つという証文を残して一応消える物語であって、その食欲な執念は「腹は淡白で悪気のない小心な性質」などという相対化を受けてつけない。

⁷赤木桁平(1980)「『道草』を読む」竹盛天雄編『別冊國文學夏目漱石必携』冬季号學燈社 P113

⁸細谷博(1998)『『道草』の味わい——<迂闊な健三>と<捨てられた父>——』『日本文学研究論文集成夏目漱石2』若草書房 P91 では、次のような記述が見られる。やや奇矯な言い方をすれば、『道草』は<島田という驚き>から始まる小説なのだともいえるだろう。ここで「其人」「此男」とめまぐるしく変化する島田の呼称も、たんなる言い換えの次元をこえて健三自身の島田に対する受けとめの激しさや動揺、その不安定を語っているように見える。

⁹桶谷秀昭(1972)『夏目漱石論』河出書房新社 P232

における島田の足跡をたどり、整理することにした。

二. 島田と島田の代理人による健三の自宅への訪問

『道草』の第七回までは、島田は、名を持たずに、ただ「帽子を被らない男」として健三の目の前に現れている。第七回に至って、やっと健三の口から島田の本名が明かされる¹⁰。それまで、作品中では正体を明かされないまま、島田は、健三に近づいても直接には何も関わっていなかった。実際に島田が関わりを持とうとしたのは、代理人を間に立て、健三の家を訪ねた後のことである。そこで初めて、健三と島田との具体的関係が始まる。島田本人をはじめ、島田の一人目の代理人として健三の家を訪ねた吉田虎吉、そして健三を訪ねて書き付けを交渉する島田の二人目の代理人の三人が、健三にアプローチしたプロセスを表(一)に纏めた。

表(一) 島田をはじめ、島田の二人の代理人が健三の自宅への訪問

内容 回数	訪問人物	本文の描写	健三に 対する 要求	健三の反応
1回目	吉田虎吉 (十一)	P318「斯ういふ人が貴方の寐て入らしやるうちに來たんですが、御病氣だから斷つて歸しました」(細君の言葉・論者注)		★健三は風邪で会わなかった。
2回目	吉田虎吉 (十二、十三)	P323 月々若干か貢いで遣つて呉れる譯には行くまいかといふ相談をすぐ其後から持ち出し	①経済 援助×	←P323 月々あとに残るものは零だと云ふ事を相手に納得させようとした。(中略)是で吉田

¹⁰ 夏目漱石(1975)『漱石全集』第六巻P307には、「さうじて歸へる間際になつてやつと帽子を被らない男の事を云ひ出した。「實は此間島田に會つたんですね」とある。

		<p>た。</p> <p>P324「どうかして元通りの御交際は願へないものでせうか」(吉田の言葉・論者注)</p> <p>→P324「するとまあたゞ御出入をさせて頂くといふ譯になりますな」</p> <p>→P325「いえなに夫で結構で、——昔と今とは事情も丸で違ますから」(吉田の言葉・論者注)</p>	<p>②出入り○</p> <p>の持つて来た用件の片が付いたものと解釋した健三は、心のうちで暗に彼の歸るのを豫期した。</p> <p>←P324「私の今の状況では、私の方から時々出掛けて行つて老人に慰藉を與へるなんて事は六づかしいのですが……」(健三の言葉・論者注)</p> <p>←P324 健三には御出入といふ言葉を聞くのが辛かつた。左右だとも左右ではないとも云ひかねて、また口を閉ぢた。</p> <p>P325 健三は彼を玄關迄送り出すと、すぐ書齋へ入つた。</p> <p>P331 吉田と會見した後の健三の胸には、不圖斯うした幼時の記憶が續々湧いて來る事があつた。</p>
3回目	吉田虎吉と島田(十六、十七)	<p>P332 島田は思つたよりも鄭寧であつた。</p> <p>P335「本といふものは實</p>	<p>←P332「然しこの調子なら好いだらう」健三はそれで出来る丈不快の顔を二人に見せまいと力めた。</p>

		<p>に有難いもので、一つ作 つて置くとそれが何時 迄も賣れるんですから ね」(島田の言葉・論者 注)</p> <p>P336「なに譯はないんで す。洋行迄すりや」(島 田の言葉・論者注)</p> <p>→P336 然し老人は一向 そんな事に頓着する様 子も見えなかつた。迷惑 さうな健三の體を見て も澄ましてゐた。</p>	<p>←P335 健三は黙つてゐ た。</p> <p>←P336 それが恰も自分 で學資でも出して、健三 を洋行させたやうに聞 こえたので、彼は厭な顔 をした。</p> <p>P336 二人を送り出して 又一寸座敷へ戻つた健 三は、再び座布團の上に 坐つたまゝ、腕組をして 考へた。「一體何の爲に 來たのだらう。是ぢや他 を厭がらせに來るのと 同じ事だ。あれで向は面 白いのだらうか」。(中 略)「あの人達はまた來 るんでせうか」(細君の 言葉・論者注)「來るか も知れない」(健三の言 葉・論者注)。彼は斯う 言ひ放つた儘、また書齋 へ入つた。</p>
4回目	島田(二 十一、二	P349「上げなかつたのか い」(健三の言葉・論者	健三が留守で会わなかつた

	十二二)	<p>注)「え、たゞ玄關で一寸」(御住の言葉・論者注)</p> <p>P349「とうに伺ふ筈だつたけれども、少し旅行してゐたものだから御不沙汰をして濟みませんつて」(御住の言葉・論者注)</p> <p>P349「たゞ娘の所で来て呉れつて頼まれたから行つて來たつて云ひました。大方あの御縫さんて人の宅なんでせう」(御住の言葉・論者注)</p>		<p>←P349 濟みませんといふ言葉が一種の嘲弄のやうに健三の耳に響いた。</p>
島田が比田を通して、健三に「復籍」の話を持ち出した。(二十四～二十八)				
5回目	島田(四十六)	<p>P419「此間比田の所を一寸訪ねて見ました」島田の言葉は此前と同じやうに鄭重であつた。然し彼が何で比田の家へ足を運んだのか、其點になると、彼は全く知らん顔をして澄ましてゐた。</p> <p>P420「御夏も年を取ったね。(中略)昔はあれで中々勝氣な女で能く私</p>	<p>①復籍の話題に触れない</p> <p>②御夏のこと</p>	<p>←P419 健三は自分の前に坐つてゐる人の眞面目さの程度を疑つた。果して此男が彼の復籍を比田迄頼み込んだのだらうか、又比田が自分達と相談の結果通り、斷然それを拒絶したのだらうか、健三は其明白な事實さへ疑はずには居られなかつた。</p> <p>←P420 健三は次第に言葉少なになつた。仕舞に</p>

		<p>に喰つて掛つたり何かしたものだ(後略)」 →P420 彼(島田・論者注))は不圖健三の眼を見た。さうして相手の腹を讀んだ。一旦横風の昔に返つた彼の言葉遣が又何時の間にか現在の鄭寧さに立ち戻つて來た。健三に對して過去の己れに返らう返らうとする試みを遂に斷念してしまつた。 P421「李鴻章の書は好きですか」彼は突然斯んな問を發した。健三は好きとも嫌とも云ひ兼た。 「好きなら上げてでも好ござんす」。あれでも價値にしたら今ぢや餘つ程するでせう」</p>	<p>③鴻章 の掛け 物を話 題にし て</p>	<p>は黙つたなり凝と島田の顔を見詰た。 ←P421 島田から物を貰ふ氣の絶對になかつた健三は取り合はずにゐた。島田は漸く歸つた。 ★健三夫婦のそれをめぐつての会話</p>
6回目	島田(四十七、四十八、四十九)	<p>P425「何ういふ加減だらう」彼(島田・論者注)は獨り言を云つて、草花の模様丈を不透明に擦つた丸い蓋の隙間を覗き込んだ。</p>		<p>←P426 健三の記憶にある彼は、斯んな事を能く氣にするといふ點に於て、頗る几帳面な男に相違なかつた。彼は寧ろ潔癖であつた。持つて生れた倫理上の不潔癖と金</p>

錢上の不潔癖の償ひに
でもなるやうに、座敷や
縁側の塵を氣にした。

P427 健三はたゞ金銭上
の慾を満たさうとして、
其慾に伴なはない程度
の幼稚な頭腦を精一杯
に働らかせてゐる老人
を寧ろ憐れに思つた。さ
うして凹んだ眼を今擦
り硝子の蓋の傍へ寄せ
て、研究でもする時のや
うに、暗い灯を見詰めて
ゐる彼を氣の毒な人と
して眺める。

P427 彼 (健三・論者注)
は神といふ言葉が嫌で
あつた。然し其時の彼の
心にはたしかに神とい
ふ言葉が出た。さうし
て、若し其神の眼で自分
の一生を通して見たな
らば、此強慾な老人の一
生と大した變りはない
かも知れないといふ氣
が強くした。

P427 その晩の島田は此
前來た時と態度の上に
於て何の異なる所もな

		<p>P428 島田の自分を見る眼が、さつき擦り硝子の蓋を通して油煙に燻ぶつた洋燈の灯を眺めてゐた時とは全く變つてゐた。「隙があつたら飛び込もう」落ち込んだ彼の眼は鈍い癖に明らかに此意味を物語つてゐた。</p> <p>→P430 夫でも島田は容易に立たなかつた。</p> <p>P430「夜分なら大抵御暇ですか」</p>	<p>かつた。應對には何處迄も健三を獨立した人と認めるやうな言葉ばかり使つた。</p> <p>P428 彼は此老人が或日或物を持つて、今より判明した姿で、屹度自分の前に現れてくるに違ないといふ豫覺に支配された。其或物がまた必ず自分に不愉快な若くは不利益な形を具へてゐるに違ないといふ推測にも支配された。</p> <p>←P429 自然健三はそれに抵抗して身構へなければならなくなつた。</p> <p>P429 健三は又島田の方を向き直つた。けれども彼の注意は寧ろ老人を離れてゐた。腹の中で早く歸つて呉れば好いと思ふので、其腹が言葉</p>
--	--	--	---

		<p>→P430「實は少し御話したい事があるんですが」</p> <p>→P430 老人は健三の手に持った暗い灯影から、鈍い眼を光らして又彼を見上げた。</p>		<p>にも態度にもありありと現れた。</p> <p>←P430 健三は生返事をしたなり立つてゐた。</p> <p>←P430 健三は何の御用ですかとも聞き返さなかつた。</p>
7回目	島田（五十二）	<p>P439「何うも少し困るので。外に何處と云つて頼みに行く所もない私なんだから、是非一つ」老人の言葉の何處かには、義務として承知して貰はなくつちや困ると云つた風の横着さが潜んでゐた。</p> <p>→P439 島田が變な顔をした。</p>	①金	<p>P439 健三は、その次島田が來た時、例よりは忙がしい頭を抱へてゐるにも拘はらず、ついに面會を拒絶する譯に行かなかつた。</p> <p>P439 島田のちと話したい事があると云つたのは、細君の推察通り矢つ張金の問題であつた。</p> <p>←P439 健三は立つて書齋の机の上から自分の紙入を持つて來た。（中略）彼（健三・論者注）は其中から手に觸れる丈の紙幣を攫み出して島田の前に置いた。</p> <p>←P439 「何うせ貴方の請求通り上げる譯には行かないんです。それでも</p>

				<p>有つ丈悉皆上げたんですよ」健三は紙入の中を開けて島田に見せた。</p> <p>P439 さうして彼（島田・論者注）の歸つたあとで、空の財布を客間へ放り出した儘また書齋へ入った。</p>
8回目？	島田（五十六）	<p>P449 島田も何かに事寄せて尻を長くした。</p> <p>P450 二十三十と纏つた金を平氣に向ふから請求し始めた。「何うか一つ。私も此年になつて倚かる子はなし、依怙にするのは貴方一人なんだから」彼は自分の言葉遣ひの横着さ加減にさへ氣が付いてゐなかつた。</p> <p>→P450 凹んだ鈍い眼を狡猾らしく動かして、じろじろ彼の様子を眺める事を忘れなかつた。</p> <p>「是丈の生活をしてゐて、十や二十の金の出來ない筈はない」彼は斯ん</p>	①金	<p>←P449 「小遣を遣らないうちは歸らない。厭な奴だ」健三は腹の内では憤つた。</p> <p>←P450 それでも健三がむつとして黙つてゐると、</p> <p>P450 彼（島田・論者注）が歸ると、健三は厭な顔をして細君に向つた。</p> <p>「ありや成し崩しに己を侵蝕する氣なんだね</p>

		な事迄口へ出して云つた。		(中略) 實に厭な奴だ」 P451 彼 (健三・論者注) は島田の後影を見送つたまゝ黙つてすぐ書齋へ入つた。
島田の先妻お常の来訪 (六十二、八十七)				
島田の養女御縫の死亡 (八十九)				
9回 目?	島田 (八十九、九十)	P549 島田は色々な事を訊いた。 P550 其時島田は彼に向つて突然斯う云つた。——「御縫もとうとう亡くなつてね。御祝儀は濟んだが」 →P551「なに病氣が病氣だから仲も癒りつこないんです」島田は平然としてゐた。 P551「それに就いて是非一つ聞いて貰はないと	①金	←P549 それに相當な受應をしてゐる健三の胸に何んな考へが浮かんでゐるか丸で氣が付かなかつた。 P550 自分の前にゐる老人にだけ意味のある眼を注いだ。何の爲に生きてゐるか殆んど意義の認めやうのない此年寄は、身代りとして最も適當な人間に違なかつた。 ←P550 健三も急に氣の毒になつた。「さうですか。可愛想に」 ←P551 健三は聴かない

	<p>困る事があるんですが」 此所迄来て健三の顔を見た島田の様子は緊張してゐた。</p> <p>→P551「まあ左右で。御縫が死んだんで、柴野と御藤との縁が切れちまつたもんだから、もう今迄のやうに月々送られる譯に行かなくなつたんでね」島田の言葉は變にぞんざいになつたり、又鄭寧になつたりした。</p> <p>(中略)彼はまた調子を改めた。「兎に角斯うなつちや、御前を措いてもう外に世話をして貰ふ人は誰もありません。だからどうかして呉れなくつちや困る」</p> <p>→P552 島田は凝と健三の顔を見た。(中略)健三の態度から深入の危険を知つた島田は、すぐ問題を區切つて小さく</p>	<p>先から其後を推察する事が出来た。「又金でせう」</p> <p>←P552「さう他にのし懸つて来たつて仕方がありません。今の私にはそれ丈の事をしなければならぬ因縁も何もないんだから」</p>
--	---	---

	<p>した。「永い間の事は又 緩々御話しをすとして、 ぢや此急場丈でも一つ」</p> <p>→P552「此暮を越さなく つちやならないんだ。何 處の宅だつて暮になり や百と二百と纏つた金 の要るのは當り前だら う。」</p> <p>→P553「ぢや云ふが、御 前の収入は月に八百圓 あるさうぢやないか」</p> <p>→P553 島田は其所迄來 て黙つた。健三の答が自 分の豫期に外れたとい ふ風も見えた。(中略) 「ぢやいくら困つても 助けて呉れないと云ふ</p>	<p>←P552 健三には何うい ふ急場が彼等の間に持 ち上つてゐるのか解ら なかつた。</p> <p>←P552 健三は勝手にし ろといふ氣になつた。 「私にそんな金はあり ませんよ」</p> <p>←P553 「八百圓だらう が、千圓だらうが、私の 収入は私の収入です。貴 方の關係した事ぢやあ りません」</p>
--	---	---

		<p>んですね」</p> <p>→P553 島田は立ち上つた。沓脱へ下りて、開けた格子を締める時に、彼は又振り返つた。「もう参上りませんから」最後であるらしい言葉を一句遺した彼の眼は暗い中に輝やいた。</p>	<p>←P553 「ええ、もう一文も上ません」</p> <p>←P553 健三は敷居の上に立つて明らかにその眼を見下した。然し彼はその輝きのうちに何等の凄さも怖ろしさも又不氣味さも認めなかつた。彼自身の眸から出る怒りと不快とは優にそれらの襲撃を跳ね返すに充分であつた。</p>
10回目?	二人目の代理人 (九十四)	<p>P564「島田の事に就いて一寸御目に掛りたいつていふんです」(御住の言葉・論者注)。「今差支るからつて返して呉れ」(健三の言葉・論者注)</p> <p>P565「明後日の午後に来て下さいと云つて呉れ」</p>	<p>★健三は忙しいから、面会を断つた。</p>

		健三も仕方なしに時日を指定した。		
11回目?	二人目の代理人 (九十五、九十六)	<p>P569「あの書付と引き易へになすつた方が好くはありませんか」</p> <p>→P570「責めて三百圓位にして遣る譯には行きませうまいか」</p> <p>→P571 相手は漸く懸引を已めた。「ぢや兎も角も本人によくさう話して見ます。其上で又上る事にしますから、どうぞ何分」</p>	<p>①書き付け</p> <p>②三百圓×</p> <p>②百圓〇</p>	<p>P566 彼の指頭は赤い印氣で所々汚れてゐた。彼は手も洗はずに其儘座敷へ出た。</p> <p>P568 さうして健三の豫期してゐた通り金の請求をし始めた。</p> <p>←P569 健三は其書付を慥に覚えてゐた。</p> <p>P570 「まあ百圓位なものですね」</p> <p>←P570 「出すべき理由さへあれば何百圓でも出します」</p>
12回目?	二人目の代理人 (九十八)	<p>P576 「(前略) 金額はそれで宜しい、其代り何うか年内に頂戴致したい、と斯ういふんですがね」</p> <p>→P577 「(前略) せめて日限でも一つ御取極を願ひたいと思ひますが」</p> <p>→P577 相手が仕方なし</p>	<p>年内×</p> <p>正月中</p> <p>〇</p>	<p>←P576 健三にはそんな見込がなかつた。(中略)</p> <p>「いづれ來年にでもなつたら何うにかしませう」</p> <p>←P577 「御尤もです。ぢや正月一杯とでもして置ませう」健三はそれより外に云ひやうがな</p>

		に歸つて行つた。		かつた。
--	--	----------	--	------

説明（１）「健三に対する要求」の項目で、「○」がついている所は、交渉が成立したことを意味する。「×」がついている所は、交渉が失敗したことを意味する。

説明（２）表中、太字の箇所は、健三との交渉中、起きた事件を意味する。

説明（３）「→」は、健三の応対に対する島田あるいは代理人の反応のことである。「←」は、島田あるいは代理人の行為に対する健三の反応のことである。

表（一）に纏めたように、島田及びその二人の代理人が健三を訪問した場面は、少なくとも 1 2 回ほどある。ただし、7 回以後は、本文の第五十六回にある「島田はちよいちよい健三の所へ顔を出す事を忘れなかつた。利益の方面で一度手掛りを得た以上、放したらそれつ切だといふ懸念が猶更彼を蒼蠅くした。健三は時々書齋に入つて、例の紙入を老人の前に持ち出さなければならなかつた」（下線部分・論者）という「ちよいちよい」及び「時々」の記述によって、訪問の回数は、第四十九回から五十六回にかけて、1 回とは限らず、それを上回る可能性があると考えられるため、「？」を付けて、不確定にしたわけである。それにしても、合計した訪問回数は、最低限 1 2 回数えられる。

三. 島田の健三への交渉

次に、表（一）に即して、島田が健三とどのように交渉しているかを見よう。

表（一）に示したように、1 回目に健三を訪問した時、島田の一人目の代理人吉田虎吉は最初に月々島田への経済援助の件を持ち出したが、健三に断られたことによって、それを撤回した。しかし、その後、吉田虎吉はすぐ畳み掛けるように島田の健三の家への出入りを求めて、許された。このように、経済援助の念願は叶わなかつたが、健三の家への出入りが許されたことによって、島田は、それ以後、健三との関わりを持つことができた。健三との関わりを持つことさえできれば、最初に断られた経済援助が復活する見込みがあることは誰の目にも明らかであろう。吉田虎吉は経済援助の問題を先送りし、健三との関わりを持つように交渉した、この 2 回目の交渉は、成功したと言える。それと同時に、島田が計画的に健三に接近していく、以後の展開も読者に予想される。

そして、3 回目の訪問の時、吉田に伴われて訪ねてきた、「かねて横風だといふ

評判のある男」(十七)の島田は、「思つたよりも鄭寧であつた」(十七)。しかし、会話を交わしているうちに、「迷惑さうな健三の體を見ても澄ましてゐた」(十七)とあるように、島田は健三の反応に一向無頓着であつた。さらに、4回目の訪問では、結果的に健三の留守で直接会わなかつたが、「たゞ娘の所で来て呉れつて頼まれたから行つて来たつて云ひました。大方あの御縫さんて人の宅なんでせう」

(二十二)と御住が伝えたことから、島田が養女御縫の所へ行つてきたことが分かる。そして、すぐその後、島田が比田を通して健三に持ち出した「復籍」の件(二十四～二十八)、及び御縫の死亡(八十九)とを合わせてみると、第二十二回で、島田が養女御縫の所へ行つたのは、御縫の病態がひどくなつたからとも考えられる。このように、御縫が重態になつたことに伴つて、経済援助が断ち切られる不安を島田が感じたに違いない。もし、それがなければ、御縫の所から帰つた後の時点で、すぐ比田を頼んで健三に「復籍」の件を持ち出す必要はなかつたであろう。ここまでの箇所からは、島田と健三との交渉の始まりの背景が、二人の交渉の場面から浮かんでくる。

具体的な交渉が行なわれるのは、5回目の訪問からである。「言葉は此前と同じやうに鄭寧であつた。然し彼が何で比田の家へ足を運んだのか、其點になると、彼は全く知らん顔をして澄ましてゐた」(四十六)とあるように、島田は、「復籍」の件に触れなかつた。ここでは、3回目の訪問に見られる「澄ましてゐた」島田の態度には変わりはない。ところが、健三の姉のことを話題にし、「姉が蔭で聴てゐたら嘸怒るだらうと思ふやうに横柄であつた」(四十六)島田の言い方に対して、「健三は次第に言葉少なになつた。仕舞には黙つたなり凝と島田の顔を見詰」(四十六)るようになった。健三の対応上の変化に対して、島田は「不圖健三の眼を見た。さうして相手の腹を讀んだ。一旦横風の昔に返つた彼の言葉遣が又何時の間にか現在の鄭寧さに立ち戻つて来た。健三に對して過去の己れに返らう返らうとする試みを遂に斷念してしまつた」(四十六)。このように、第3回の訪問とは違つて、健三の態度に目を配り、その変化に応じて、一旦横風になつた昔の言葉遣いを再び丁寧にしたという島田の対応の仕方がここに見られる。

同じく6回目の訪問でも、「島田は此前来た時と態度の上に於て何の異なる所もなかつた。應對には何處迄も健三を獨立した人と認めるやうな言葉ばかり使つた」(四十九)とあるように、健三に對して島田は横風な言葉遣いではなく、丁寧な

言葉遣いをしている。だが、その丁寧さは偽装である。「隙があつたら飛び込もう」落ち込んだ彼の眼は鈍い癖に明らかに此意味を物語つてゐた」(四十九)と書かれているように、言葉遣いの丁寧さとは裏腹に、島田の目はよく健三を観察していると察せられる。そして、帰りがけに、「實は少し御話したい事があるんですが」と言った島田は、やはり「健三の手に持った暗い灯影から、鈍い眼を光らして又彼を見上げた」(四十九)と、健三を観察している。

6回目で健三に言った「實は少し御話したい事があるんですが」の内容は、第7回目の訪問の時に、明らかになった。それは、「何うも少し困るので。外に何處と云つて頼みに行く所もない私なんだから、是非一つ」(五十二)と、島田の本人の口から直接、健三に対して初めて経済的援助を言い出したことである。ここでは、「老人の言葉の何處かには、義務として承知して貰はなくつちや困ると云つた風の横着さが潜んでゐた」とあるように、今までの丁寧な言葉遣いの中に潜んでいた「横着さ」が現れたことに注目すべきである。結局、「何うせ貴方の請求通り上げる譯には行かないんです。それでも有つ丈悉皆上げたんですよ」(五十二)と言って、健三は島田に金を渡して済ませた。かつて金銭で結ばれた健三と島田との関係は、ここでまた復活した。一回目から始まった島田の交渉は、こうして金銭的要求という島田の言葉の丁寧さに隠されていた本体を最終的に表し、それに健三が応じる形で一応、決着した。

しかし、二人の関係は、以後、今度は金銭的要求という場の中で、変質を始める。前述したように、第7回から以後は、島田が訪ねた場面を明らかに描いた次回まで、島田がどれだけ健三を訪ねに来たかは、不確定なため、確実な場面を8回目としたが、その間に同じ様な金銭的要求が何回も続いたことは明らかである。そうした要求が続く中、8回目の訪問の時には、「小遣を遣らないうちは歸らない。厭な奴だ」健三は腹の内で憤つた」(五十六)とあるように、繰り返し金銭を目当てにやって来る島田に対して、健三はそうした関係の維持を負担に思い始める。作品中、島田本人が直接に健三に経済的援助を求めた場面が書かれている箇所は、3回ある。それは先に挙げた7回目を含めて、以下のとおりである。

第7回目の訪問

「何うも少し困るので。外に何處と云つて頼みに行く所もない私なんだから、

是非一つ」老人の言葉の何處かには、義務として承知して貰はなくつちや困ると云つた風の横着さが潜んでゐた」(五十二)

第8回目の訪問

二十三十と纏つた金を平氣に向ふから請求し始めた。「何うか一つ。私も此年になつて倚かる子なし、依怙にするのは貴方一人なんだから」彼は自分の言葉遣ひの横着さ加減にさへ氣が付いてゐなかつた。(五十六)

凹んだ鈍い眼を狡猾らしく動かして、じろじろ彼の様子を眺める事を忘れなかつた。「是丈の生活をしてゐて、十や二十の金の出來ない筈はない」彼は斯んな事迄口へ出して云つた。(五十六)

第9回目の訪問

「それに就いて是非一つ聞いて貰はないと困る事があるんですが」此所迄來て健三の顔を見た島田の様子は緊張してゐた。(九十)

「まあ左右で。御縫が死んだんで、柴野と御藤との縁が切れちまつたもんだから、もう今迄のやうに月々送られる譯に行かなくなつたんでね」島田の言葉は變にぞんざいになつたり、又鄭寧になつたりした。(中略)彼はまた調子を改めた。「兎に角斯うなつちや、御前を措いてもう外に世話をして貰ふ人は誰もありやしない。だから何うかして呉れなくつちや困る」(九十)

「此暮を越さなくつちやならないんだ。何處の宅だつて暮になりや百と二百と纏つた金の要るのは當り前だらう。」(九十)

島田本人が直接に健三に金銭的援助を要求した3回の場面を見ていくと、次の三点の特徴が見られる。

第一は、島田が要求した金額が具体的になりつつあり、度を重ねるにつれて増していることである。

7回目の訪問で金銭的援助を初めて要求した島田は、ただ「何うも少し困るので。外に何處と云つて頼みに行く所もない私なんだから、是非一つ」と言っただけで、具体的な金額に触れていなかった。それに対して、「二十三十と纏つた金を平氣に向ふから請求し始めた」とあるように、八回目では金銭的援助の額が書か

れるようになる。そして、島田が、「是丈の生活をしてゐて、十や二十の金の出来ない筈はない」と口に出したように、金額の要求が徐々に具体化している。そして、九回目の訪問で、島田は、「此暮を越さなくつちやならないんだ。何處の宅だつて暮になりや百と二百と纏つた金の要るのは當の前だらう」と言つて、要求金額を一桁増している。こうして見ると、島田が要求する金額が具体的になりつつあり、度を重ねるにつれて増していることは明らかである。島田の金銭的要求は、正しく石崎等が指摘した通り、「計画的かつ漸進的」¹¹である。

第二は、金銭的援助を要求する際に、島田の横着さがだんだん露呈すると共に、島田の眼が、絶えず健三に向けられるようになってきていることである。

7回目の訪問で、島田が金銭的援助を要求した場面では、「老人の言葉の何處かには、義務として承知して貰はなくつちや困ると云つた風の横着さが潜んでゐた」(五十二)と説明されている。また、8回目の訪問にも、「彼は自分の言葉遣ひの横着さ加減にさへ氣が付いてゐなかつた」(五十六)とある。この2回とも、明らかに島田の「横着さ」が強調されている。そして、9回目の訪問場面では、「此暮を越さなくつちやならないんだ。何處の宅だつて暮になりや百と二百と纏つた金の要るのは當り前だらう」(九十)と言つた島田の言葉の「當り前」に、島田の「横着さ」が公然と現れている。このように、金銭的援助を要求する際に、健三に対して丁寧さを偽装していた島田は、だんだんその横着さを隠さずに露呈するようになったと見られる。と同時に、島田の眼が健三に向けられているということも重要なポイントである。8回目に訪問した島田は「凹んだ鈍い眼を狡猾らしく動かして、じろじろ彼の様子を眺める事を忘れなかつた」。そして、9回目に訪問した時も、「此所迄來て健三の顔を見た島田の様子は緊張してゐた」とあり、いずれも横着に健三に金銭的援助を要求すると共に、島田は絶えず健三の反応を観察している。これらから、言葉の丁寧さの中に横着さを見せながら、一方では健三の反応を探り、最終的な金銭的要求を達成しようとする島田の交渉パターンが明らかになる。

第三は、島田の金銭的要求の動機である。

¹¹石崎等(1969)『道草』——その倫理的問題をめぐって——『国文学研究』第41巻早稲田大学文学会 P86

平岡敏夫は、「道草」において島田の要求がもっとも切実度を増してくるのは、義理の娘のところから来ていた年金が娘の死によって来なくなったから¹²だと述べているが、金銭的要求が最初に出されたのは、それより早く、先に挙げた7回目の訪問（第五十二回）においてである。それは、第二十二回で養女御縫の所へ行ってから、比田を通して「復籍」の件を持ち出した後、御縫が死亡したことが明らかにされる第八十九回の時点より前のことであった。確かに、健三は第六十一回で、細君と御縫の病気をめぐって会話を交わし、第六十二回で御縫の死を予知しているが、御縫の死が島田と健三との間に話題として出されたのは、9回目に島田が訪問した時（第八十九、九十回）である。そして、それは、先に挙げた島田が3回目に健三に対する金銭的援助を要求したところなのである。こうしてみれば、7回目の訪問と8回目の訪問での金銭的要求は、御縫が死ぬ前に出されたものであり、しかもその間に、同じ様な要求が度々あり、次第にエスカレートしていったことが分かる。また、金銭的援助が初めて成立した7回目の訪問の時点を考えてみると、島田が、御縫の所へ行ったのは、4回目の訪問であり、そこで御縫の容態が悪いことを知り、経済的援助が断ち切られる恐れに襲われ、その後、5回目、6回目と訪問を繰り返して、7回目で初めて一人目の代理人吉田に頼んで交渉して失敗した経済援助の件を再び持ち出したと考えられる。このように、島田の金銭的要求の動機は、御縫の死ではなく、それより早い時点の、御縫の重態を知った時から切実で差し迫ったものに具体化しており、それに合わせて訪問が繰り返され、島田の健三に対する金銭的要求が始まり、次第にそれをエスカレートさせていったのだと見たほうが適切であろう。そうなると、健三と交渉する島田は、非常に計画的・打算的に行動を起こしており、しかも精密に計算して交渉を進めていったのだと思われる。

健三に打算的に接触する島田の態度を見る目印としては、「横着」さと「丁寧」さがある。島田はこの両者を巧みに使分けて、健三の態度や反応をよく観察して、

¹²平岡敏夫(2000)『漱石ある佐幕派子女の物語』おうふう P31。平岡敏夫以前でも同じように、石崎等(1969)「『道草』——その倫理的問題をめぐって——」『国文学研究』第41巻早稲田大学文学会 P86では、お縫さんの死によって島田が物質的な限界状況に追い込まれたという見解が示されている。

健三への対処を変えている。こうして見ると、島田は、目的を達成するために臨機応変のきちんとした手段と対応をとっており、一方、また現実を見詰めて譲歩できる人物でもある。それは、島田の二人目の代理人が書き付けを健三に売付けるために、健三を訪問した10、11、12回目の交渉から分かる。そこで、島田は最初「三百圓で年内に」という条件を出したが、その通りにならなくても、「百圓で正月一杯」ということで島田は合意し、決着をつけたことから窺われるのである。

四. 終わりに

以上、島田の健三への交渉の経過をたどってきた。その交渉経過からは、島田が計画的に健三に接近し、最終的にかなりまとまった金額を得るために漸進的に金銭的援助を要求していった経緯がはっきり浮かんでくる。島田は、その点で、目的を達するために計画的合理的に行動している近代的人間であり、健三にとっては、そうした近代的世界を表徴する人物とも見られる。こういった島田に対応する健三の態度から、健三の性格の一端を見ることができる。それについては、今後考えていくこととしたい。

テキスト

『漱石全集』第六巻 岩波書店 1975年

参考文献

- 平野謙(1956)「夏目漱石」『芸術と実生活』講談社
- 奥野健男(1956)「『道草』論」『解釈と鑑賞』
- 宮井一郎(1967)『漱石の世界』講談社
- 石崎等(1969)「『道草』——その倫理的問題をめぐって——」『国文学研究』第41巻早稲田大学文学会
- 桶谷秀昭(1972)『夏目漱石論』河出書房新社
- 荒正人(1979)『漱石——人とその作品』日本リーダーズダイジェスト社
- 相原和邦(1979)「評釈・『道草』」『國文學解釈と教材の研究』第24巻6号
- 赤木桁平(1980)「『道草』を読む」竹盛天雄編『別冊國文學夏目漱石必携』冬季号
學燈社
- 平岡敏夫(1983)『漱石序説』塙書房
- 三好行雄編(1984)『鑑賞日本現代文学』第5巻角川書店
- 石井和夫(1986)「『道草』・関係の論理」『國文學解釈と教材の研究』第31巻3号
- 大岡昇平(1988)『小説家夏目漱石』筑摩書房
- 細谷博(1998)「『道草』の味わい——〈迂闊な健三〉と〈捨てられた父〉——」『日本文学研究論文集成夏目漱石2』若草書房
- 平岡敏夫(2000)『漱石ある佐幕派子女の物語』おうふう